

ホワイトヘッドの実在論

大塚 稔

一

ハーツホーンによれば、形而上学期のホワイトヘッドは、合理論者、真正な意味での経験論者、実在論者、觀念論者、および偉大な最初の哲学的有神論者だとされている⁽¹⁾。合理論者だというのは、彼が他に取りうるいかなる合理的な選択肢もないという意味で、必然的な、そのような真理を具現する諸觀念の合理的方法を定式化し実行したことを示す。真正の意味での経験論者だというのは、彼が経験をあたかも身体をとりまく世界の単なる認識的映出(cognitive mirroring)という目的にのみ集められる何ものかのように考える似而合理論者のようにではなく、経験を享受し、もがき、共感的で応答的な活動——その第一義的な直観的与件は、それ自身の過去の状態と将来への志向および身体内(心の内ではないということ)での諸過程——と見なしたことを、そしてそれを実際に記述してみせたことを示す。実在論者だというのは、彼が過程というものを正確に記述したこと、つまり真なる関係性は感じや何かについての意識としてのみ与えられる抱握(prehension)にあるということ、換言すれば、抱握されるものはそれを抱握するものを抱握せず(時間の不可逆性)その抱握者にはなんの関係もないということによって、自己中心的な状況から

ほんとうの意味で抜け切れたことを示す。観念論者だということは、観念論という言葉で、主体性が全ての存在の原理を意味されているとすれば、彼は全くの観念論者であることを示す。なぜなら、彼にとり実在とは、その対象が先行する諸主体の世界であるような主体であると同時に、後続する諸主体に対しては対象となろうとする主体を意味しているからだという。最初の偉大な哲学的有神論者だというのは、彼が神性を始源的本質 (Primordial essence)⁽³⁾ ないし人格と帰結的狀態 (Consequent state)⁽⁴⁾ ないし実在性とを区別することによって、はじめて真剣に神の個性を取り扱おうとしたことを示す。勿論これらはホワイトヘッドの形而上学がどうにで解釈されるかということではない。むしろ、このどれ一つを欠いても彼の形而上学を正當に評価できないことを示そうとしているのであろう。そして、この点に関しては異論はないのだが、問題はこれを究極的な立場とするかという点である。それを一つ選び取らねばならないとすれば、やはり実在論者⁽⁵⁾ としてのホワイトヘッドを挙げるべきであらう。徹底した実在論者は、徹底した経験論者でもあるし、合理論者でもありうる。また観念論者とも哲学的有神論者ともなりうるであらう。本稿では、彼の科学哲学期が——とりわけ晩年に至って顕著に見られる神秘主義への関心の高まりが意味づけ理論に根ざしているという意味をも含めて——形而上学期への道を開きうるものであること、従って科学哲学期での形而上学批判が全ての形而上学批判でないことを確認することによって、徹底した実在論者が、徹底した経験論者であり、同時に合理論者であること、更には哲学的有神論者の萌芽とさえなりうることを示すのが目的である。

註

- (1) Whitehead, *Philosophy Selected Essays*, 1935-1970, pp. 10-14. ここではその論旨を要約している。
- (2) ホワイトヘッドはこれを primodial nature と呼んでいるが、ハーツホーンは nature という表現はよくないとして essence を使っている。ibid., p. 13.
- (3) これもホワイトヘッドは consequent nature と呼んでいるが、ハーツホーンは nature を state に改めた方がよいと述べている。

- (4) ハーツホーンもホワイトヘッドは、实在論の秘密を唯一発見した者と評してはいる。Ibid., p. 5.

二

「我々が抱いている問題は、実のところ外界に我々人間の認識を適合させることにあるのであって、我々の認識を外界に適合させることではない⁽¹⁾」これは、彼の科学哲学への移行の契機となった論文「時間、空間、相対性」(一九一五)の最後に記した言葉である。これだけを取り挙げたのでは単に主観―客観の認識論に立つ实在論となんら変るところはないが、それにアインシュタインの相対性理論が介在しているという事実を考慮に入れば、新たな意味合いを帯びたものとなる。つまり、それはその後のホワイトヘッドの歩みに照らして言えば、ニュートンの絶対時空概念に取って代わった四次元―時空連続体(とりわけ時間の相対性が問題となる)の解釈をめぐるウィルドン・カーらの新観念論への批判的礎石となる实在論だということである。ウィルドン・カーらの解釈によれば、特殊相対性理論の二つの仮定――(一)相対的に等速度運動をしている糸は、全て同格である。(二)光の速度は不変である――から結果することは、共通な対象を構成するためには経験の外に、あるいは経験とは独立したところに対象を置く必要はなく、一個体の経験の範囲内にそれが限定されるだけでよいとされる。しかし問題は、このことによって特殊相対性理論がもたらした同時性の相対化(否定)が単純に受け入れられていること、および経験概念が結局のところ心(spirit)の純粋な活動に帰されてしまっている点にある⁽²⁾。

また、数学期は別にして、ホワイトヘッドの科学哲学期での思索は、既に時代を先取して言えば、論理実証主義とは完全な隔りがある。すなわち、エイヤーやライヘンバッハによって米国に持ち込まれた命題の真偽を単純に感覚―経験の検証可能性にのみ置こうとする初期の論理実証主義者達やノイラートらの百科辞典的な名目上の統一科学運動

とも根本的な対立を示しているということである。十九世紀後半から二十世紀初頭にかけては、伝統的な諸科学（数学、生物学、物理学）の知の枠組に取って代わって、新たな枠組が完成される激動期にあたる。ホワイトヘッドの表現を借りればこの間の事情は、次のように語られる。「科学の進歩は、現在において転換期に到達した。物理学の安定した土台は崩壊し、さらに始めて生理学が知識の寄せ集めではない強力な知識体系としてその地歩を築きつつある。科学思想の古い土台は意味不明となり、時間、空間、物質、エーテル、電気、メカニズム、オーガニズム、配列、構造、パターン、機能の全ての意味が再考を迫まられている^(a)」と。ホワイトヘッドは、このような諸概念の再考をとりあえず、時間と空間と物質に焦点を合わせて、諸科学の根底に潜む統一的特性を明確に表現し、それを一つの汎物理学^(b) (pan-physics) として体系化しようとするわけである。そして、その際に科学哲学の理想とされるのが、「認識や感じ (feeling) や情緒 (emotions) に対してあらわれる全てのものを一定の割りあてられた諸関係のうちに取り込めるような、ある統一的概念の確立^(c)」に他ならない。これはまた、「我々の日常生活での経験を形づくっている知覚、感覚、情緒の中に流れる諸関係を発見^(d)」し体系化することでもある。従って、この汎物理学の研究領域は、単に五官による知覚—経験のみならず、より混沌としたかすかに気づく感じ (sensible feeling) をも包括するものでなければならぬ。経験の合理化は、ここまで徹底する必要があると言う。同時にこれはまた「夕陽のあの輝きは、科学者達が現象を説明するのに用いる分子や電磁波 (electric waves) と同様、自然の一部だ^(e)」とする第二性質をも客観の側に置く徹底した実在論の表明でもある。経験を好みせぬこと、自然内の諸要素の結合関係を心に関係させずに分析すること、つまりは自然を閉鎖系として扱うことがこの期の彼の立場である。がしかし、この立場が形而上学（有機体的宇宙論）との関連を孕む余地のある立場であることも忘れられてはならない。すなわち、「自然科学と形而上学とは、直接経験という共通の基盤から出発するものであり、ただ両者は異なった使命から両極に進んでいる^(f)」（傍点筆者）ののだということ、更には「科学は形而上学の必要性を減少させるものではない（中略）過去の誤まった科学

が、誤まつた形而上学の生みの親であり続けているのである⁽⁹⁾。というのが『思考の組織化』以来の立場だということである。従つて彼にとり、両者が区別される点は「自然科学がしかるべき論議の末には同意に達しうるのに対し、形而上学はこれまでもっぱら不一致のみが強調されすぎてきた⁽¹⁰⁾」という純粹に實際上の理由からだといわれる。ある抽象的観点から形而上学的探求を除外するのは、哀れむべきことだとさえ述べている⁽¹¹⁾のである。このような観点が科学哲学三部作において変更されたとは思えない。とすれば、それらの著作に散見する形而上学批判の解釈が問題となるが、それが後の彼自らが展開する形而上学を含む全般に渡る批判でないことは明らかである。ロイスクラブ(Josiah Royce)の死後設立され一九二〇年代には26名の会員がいたと言う⁽¹²⁾のメンバーであるローレンス・ヘンダーソンやウィーラー、ウィルソン並びにヘンリー・オズボーン・テイラーらの尽力により、渡米が叶ったホワイトヘッドではあるが、彼らのその時の一致した意見は⁽¹³⁾、ホワイトヘッドの仕事は未だ完成からはほど遠く、ぜひともアメリカ行きが実現されねばならないというものであった。この完成からは未だ遠いという見解が具体的に何を示しているかは問題であるが、ここでは、これを形而上学への完成というふうに解しておく。従つて「形而上学へ逆戻りすることは、火薬庫にマッチを投げ込むに等しい(中略)科学哲学者達はすぐに心を引きづり込む⁽¹⁴⁾」とか「形而上学を除去し、自然を偏見なく眺め直して出発すれば、科学を支配している多くの基本概念に新たな光が投げかけられるであらう⁽¹⁵⁾」(傍点筆者)とかに述べられる形而上学とは、要するに心に関係させずには自然の斉合な説明がなされないとする前提に立つ形而上学であり、更に言えば、第一次性質こそが明白な実在だとする点では、自然の二元分裂(Theories of bifurcation of Nature)を否定しながらも、第二次性質には当然のことながら精神の付加のみを認めてそれになるらの実在性をも与えようとしないう形而上学に他ならない。結局、知るものと知られるものとの二元論に立つ全ての形而上学が、これによつて否定されるわけである。ヒューム的主観主義もカント的構成主義も当然この批判からはまぬがれることはできない。そしてもし彼が形而上学の存在意義を先のように科学哲学期において既に認めているとす

れば、更に進むべき方向は實在論的形而上学以外にはないということになる。主観主義の独我論を認めず、構成主義による普遍性をも認めない以上、この實在論の行き着くところは、さしあたり自然に一様性を見出しておくことであるだろう。

註

- (1) The Organization of Thought (OT) p. 228.
- (2) Proc. Aristotelian Soc., n.s., V22, 1921-22. pp. 123-127.
- (3) Science And The Modern World (SMW) p. 29.
- (4) これは倫理学とか神学とか美学の理論とかとはなんら関係を持たない。それがもたらす事とするのは、諸感覚によって觀察される事物に適用されることのみ、最も一般的な考え方を決定することなのである。従って、それは形而上学でさえない(相対性理論邦訳 p. 5)と定義づけられているが、この点については後述のような解釈をとる。
- (5) Concept of Nature (CN) p. 2.
- (6) OT 所以の AE(The Aims of Education) p. 109.
- (7) CN p. 29.
- (8) AE pp. 113-114.
- (9) AE pp. 188-190.
- (10) AE p. 134.
- (11) Ibid., p. 134.
- (12) The Journal of Philosophy Vol. LVIII. No. 19. September 14, 1961 所以の W. E. Hocking の論文「Whitehead as I knew Him pp. 505-6 以下」。
- (13) CN p. 29.
- (14) Ibid., p. 24.

三

心を完全に自然認識から除外し、自然内部の相互作用において全てのものを捉え直すという観点から、まず自然の二分分裂論が否定される。その二分分裂論とは簡単に言ってしまうと、自然を実際に存在する自然と純粹に心理的な自然とに分し、実際に存在する自然を心理的な自然に置き換える精神附加論的自然観である。具体的には、自然なものについての意識 (awareness) において感知 (apprehend) される事実としての自然——木々の緑、小鳥のさえずり、太陽の暖かさ、椅子の固さ等と、そのような意識の原因となっている自然、つまり現われとしての自然の意識を生み出すように心に作用する分子や電子の推測的体系とに区分すること、そしてこの区分された二つの自然は心において会合するとされ、この心を接点にして、原因となる自然が流れ込み、現われとしての自然が流出するとする理論のことである。約言すればそれは「現われとしての自然を原因としての自然のおかげで心から流出するものと捉えること⁽⁴⁾」に他ならない。ホワイトヘッドにとって、自然は思考とは独立した自己充足的な五官を含むかすかに気づく感じによって観察される諸存在 (出来事) の複合体であって、その意味では、認識 (知覚力) の究極性が当然のこととして前提とされる。なぜ認識が存在するかという問題は、こうして認識の内容とその内的関係の分析に取って代わられることになる。認識の内容とは、経験の内容であり、その内的関係の分析とは、それを構成する要素の分析である。科学によって探求される理解とは、自然内部の諸関係に関する理解に他ならない⁽⁵⁾。

ホワイトヘッドによれば、自然の認識には三種の構成要素があるとされる⁽⁶⁾。すなわち、事実 (fact)、要因 (factor) 存在 (entity) がそれである。少し煩瑣になるが、それらの定義づけを見ておく。そのことによって「全体性内部を限定 (有限化) するというそのあり方によってどの要因もそれ自身以外の全体性の諸要因と必ず関連する⁽⁷⁾」という

關係性（意味づけ）こそが實在だとする彼独自の体系（形而上学的には有機体的宇宙論）が示されるからである。勿論、これが原因としての自然を形而上学的幻覚とし、現われとしての自然に関する我々の経験こそが自然それ自体だとする實在論のテーゼ、すなわち意味づけが経験であって、経験が意味づけなのではないというテーゼ⁽⁹⁾の確認であることは言うまでもない。カントが認識の権利問題——我々は一体何を經驗しうるか——をもとに主観の側に立つ意味づけを求めたとすれば、ホワイトヘッドは事実問題——我々は一体何を經驗するか——をもとに客観（自然）の側に意味づけを求めたと言える。

事実とは⁽¹⁰⁾単純には諸要因の結合關係とされるが、事実のどの要因もその背景に事実を有するという意味では、事実性（factuality）ないし全体性（totality）とも呼ばれる。従って「無尽蔵の關係項の間での無尽蔵の關係性をもった具体性⁽¹¹⁾」とも呼ばれるが、それはこの事実性にはいかなるクラスの要因によっても汲み尽くすことができないような不尽性（inexhaustibleness）が、意識の基本的な性質として開示されていることを示している。また事實は特異な仕方で意識に入り込むが、単にそれが諸要因の総体でないこともその不尽性から結果する。いわば事實には、個性性（individuality）が存在しないのである⁽¹²⁾。要因とは、そのような事實が要素として分化したものと言われ、存在とは思考の末端（termini）として機能する要因とされる。そして、事実と要因との關係の意識は、諸要因を含む事實の意識あるいは事実内部の諸要因の意識が、覚知（awareness）——生の意識と呼ばれ——その事實という背景が切り離された諸要因の意識、つまり諸要因の個性性（多様性）の意識が思知（recognition）——洗練された意識——と呼ばれる。關係という観点からこれを捉えなおせば、覚知にとって、諸要因間の全ての關係が内的であるとすれば、思知にとって諸存在間の全ての關係は外的なものだと言うことができる⁽¹³⁾。思知とは諸要因間の覚知の対比（比較）に他ならず、思知が事實を捉えられないのは、思知が覚知という媒介を経てのみ事實に關与できるにすぎないからである。その意味では、思知は覚知を前提とするということが出来る。また、思知が諸存在間の外的關係の意識である以上、覚知の

諸要因間の内的関係が持つその内容を捉え得ないことは言うまでもない。思知は覚知のもっていた生々しさを奪うという点で、明晰さや明確さ、強度は得られるにしても、その内容を喪失させているという⁽⁴⁾。通常これは「思知されるものは伝達されるが、覚知されるものは伝達不可能である⁽⁵⁾」と表現されるものである。

そしてホワイイトヘッドは、これらの三要素と意識（覚知、思知）との関連から、そこに共通な真理として、限定ないし開削⁽⁶⁾（canalisation）作用（有限化と言ってもよい）が働いていることを指摘する。つまり、抽象的なものは具体的なものの内部における限定であり、存在は全体性（事実の不尽性が強調される場合に単なる事実と区別して使用される）の内部における限定であり、要因は事実の内部における限定であり、事実内部のそれ自身の観点との関連による意識は事実をその意識において感知された事実限定しているというようにである⁽⁴⁾。そうして、この各々の限定を全体性との関わりという逆の観点から捉えたのが、先述した「全体性内部を限定する」というそのあり方によって、どの要因もそれ自身以外の全体性の諸要因と必ず関連する⁽⁷⁾という彼の言明に他ならない。「思知に対する存在であって、意識による感知において、他の諸存在との結合関係や事実内部の要因⁽⁸⁾のある体系的構造を開示しないようなものはない」というのである。換言すれば、有限なものは全て全体性との関わりを含むというのが、意味づけ理論（the theory of significance）の核心である。そして、自然内のこのような要素間の意味づけが、とりもなおさず経験と呼ばれるものであって、一般に知覚（Perception）とは、覚知に思知が付加された要因の意識と言われるが、一個の要因ないし存在としてある人間（身体）の経験としてこの意味づけ理論の例外ではない。むしろその特殊例と言ふべきものである。

註

- (1) CN pp. 30-31
- (2) Ibid., p. 32.

- (3) Ibid., p. 41.
- (4) CN p. 13 『相対性理論』(邦訳) p. 15.
- (5) 『相対性理論』 p. 18.
- (6) An Enquiry Concerning The Principles of Natural knowledge) PNK p. 12.
 せうじてい のうりんざいしぎとじつじぎを語られたこと。
- (7) 以下の論述は相対性理論を中心にしてまとめられている。
- (8) Ibid., p. 16.
- (9) Ibid., p. 16.
- (10) Ibid., p. 16.
- (11) Ibid., p. 18.
- (12) CN p. 13.
- (13) 開削とらうのはヘルクソンの用語である。ここでは、最も一般的な有限性の概念のために使用されている。
- (14) 『相対性理論』 p. 17.
- (15) Ibid., 18-19.

四

この知覚論(意味づけ理論)から、先述し実在論的立場からの認識の前提が、結局どのような知覚の前提になるのか、およびホワイトヘッドにとっての事実とは何であり、要因とは何であるのかを見ておかねばならない。そうすることによって、物理学は自然の偶然的関係の学問であり、幾何学は自然の一樣な関係性の学問であるという⁽⁴⁾、彼の古典的なし保守的な信念の依り所を捉えることができる。それは同時に、合理主義者としてのホワイトヘッドの

一面を指摘することもある。

自然認識の根源が、事実性を剝奪された思知によりも覚知にあることは既に明らかだが、もし意味づけ理論が認められるとすれば覚知が存在(要因)を認知(cognisance)するには、必然的に二通りのものが必要となる。一つは意味づけるもの(signifying)で他は意味づけられるもの(signified)である。そして、意味づけるもの(識別されるもの⁽³⁾)としての要因の覚知が「形容態による認知」(cognisance by adjective)と呼ばれ、意味づけられるもの(識別しうるもの)としての要因の覚知が「関係性による認知」(cognisance by relatedness)と呼ばれる。「形容態による認知」は、存在の積極的な認知であり、この認知によって存在は他の諸存在との関係において明確な性格として感知される。つまり、それは「それ自らの個体的特異性(individual peculiarities)でもって弁別される⁽⁴⁾」ということである。そうして弁別された再現する存在が、いわゆるホワイットヘッドの言う対象(objects)であって、それには「感覚対象」(自己同一的なものとして追跡される最も単純な不変性を持つもので、例えば色、音、味等の五官による感覚や圧迫、身体的な感じによって捉えられるものを言う⁽⁵⁾)。通常これは第二性質として感じ取られるものだが、ここではそれが要因の覚知という実在論的レベルでの一般化であることは言うまでもない。、「「知覚対象」(日常我々が存在と呼んでいるもので、例えば、椅子、机、石等のものを示す。感覚対象は通常この知覚対象と結合されて認知される場合が多い)および「科学的対象」(例えば電子)があるとされる。「関係性による認知」は存在(対象)との関係において、つまり意味づけられる場の諸存在に対する関係において、ただの関係項(relata)としてのみ作用する、「についての意識」である。そうしてこの意味づけられる場における一定の存在ないし諸存在に対して、かくかくしかじかの関係を持つところの「なにものか」として消極的に認知されるのが、いわゆる出来事と呼ばれるものである。それは、ある場所にある時間に存在するものとして感知される。例えば「赤い布片がある」と判断する場合⁽⁶⁾まず何ものかの赤性が、他の青性等の対象とは区別されて認知され、ついでその赤性の故にその何ものか(布片)を意識する。これが「形容態

による認知」であって、その場合対象が自己充足的なそれ自身であるものとして認知されていること、および他の諸存在（青性）の代わりに赤性が認知されるのは、単なる偶然であるということ、この二点に留意されなければならない。これは関係性の破れのしるしだという⁹⁾。また我々は、赤い布片がそこにあること、それが見ている間存在していること、つまりはそれが時間空間的な位置を有しているものとして認知する。これが関係性による認知であって、その場合、それが存在としての要因を諸存在の一定の体系のなかに、事実内部の有限性の特殊な開陳として、置かれていることに留意する必要がある。一般に自然認識とは、ホワイトヘッドの場合、覚知のもつそのような「関係性による認知」をもとにその一様な内的関係を探り出すことにあると言ってよい。そして、この覚知が更に自然のこの関係性に限定されると、感覚覚知（sense-awareness）という表現がとられ、「意識から論理的、美的、道德的な感知の持つその観念性を剥ぎ取った後に残るもの¹⁰⁾」と定義される。これが、これまで感じやかすかに気づく感じおよび、「についての意識」として表現されてきた覚知の本体である。従って、先の認識の前提とは、狭義には一種の直観とも言うべきこの感覚覚知の前提だったということになる。「観念性と自然とは、おぼろげな覚知においておぼろげに結び合わさっている。我々は事実内部の諸要因のある一定の集まりを覚知していて、この集まりを私は自然と呼んでいる¹¹⁾」のだと言う。自然とは、極言すれば、この感覚覚知によって感知された諸要因の体系に他ならない。そしてこの感知された自然内の要因こそが実は出来事と言われるものなのである。結局、先の「関係性による認知」は時空概念がそこから派生するこの出来事間の結合関係（意味づけ）に、つまりその共軛関係に還元されることになる。

出来事の結合関係には、延長関係と共軛関係があり、延長関係というのは¹²⁾単純には、各出来事はその部分となっている他の出来事をおおっており、またそれらがその部分であるような他の出来事によっておおわれているか、あるいは両出来事が共にその部分となるような出来事を持っていないかに区分される。自然の外在性は、この関係の所産であり同時に時間空間も、つまるところそれらの関係から派生するとされる。すなわち、この延長関係は、空間的関

係においては出来事を現実的なものとして表わし、時間的關係においては出来事を自然の生成（推移ないし創造的展開）を含むものとして表わすということである。この意味では、出来事には可能性というものがなく、常に自然において成るものとされる。更に言えば、それはそれ自身そこに今現にあるものとして、すなわち決して再現しないものとして感知されるわけである。出来事とはそれ故に、あるがままのものであり、まさに關係づけそのものだと言うことができる。先に關係項としてのみ作用すると言ったことはこのことに他ならない。そして、今そこに現にあるという出来事の性質が、今——現在という同時的な拡がりをもって面前にあるものとして、知覚しつつある出来事（これが心でも知覚者でもないことは言うまでもない。それは自然内であって、それをもとにして心が知覚するようなもので、粗雑に言えば、身体をそなえた心の生理的活動とも言われる⁹⁰）に關係づけられる場合には、その出来事とその同時的な拡がりをもったものとは、共軛（cogredience）關係にあると言われる。この同時的拡がりを持ったものというのが、すなわち全体的出来事であり無限とも言われる持続（duration）であって、それは「感覺覚知に開示された本質的要因である同時性によって限定されている自然の具体的厚板」と定義される⁹¹。つまり感覺覚知によって直接に示される同時性を具現する自然内の存在（要因）が、持続だということである。従って一つの出来事が今——現在という有限性においてあるものとすれば、無限な一つの持続との共軛關係において、それは一つの同時的な全自然を、つまりは無限性を蔵することになる。結局、このような出来事の一様な意味づけ（關係性）に自然の一様性と時空の一様性を基礎づけようとするのが合理主義者としてのホワイトヘッドの姿だということになる。ホワイトヘッドにのつての事実とは、出来事間の結合關係であり、推移であり、持続であり、更に言えばそれらをもとに推測的にしか表現しえないような過程である。それぞれの持続が出現し、推移するということが自然の過程の描写であるという⁹²。何ものかが推移しているということ、および同時的な生起があるという感覺覚知の直接的な開示は、こうして徹底した実在論の上に築かれるわけである。

ホワイトヘッドの科学哲学期の思想は、彼自らが語っているように⁽⁹⁾ 確かに保守的である。当時革新的であったアインシュタインの一般相対性理論は、物理学（重力場）を幾何学に還元することによって、時空の不均質（空間の歪み）を公然の事実としていたからである。しかし、アインシュタインの特殊相対性理論によって仮定された光（これはホワイトヘッドの解釈によれば偶然的な関係に根ざしている対象にすぎない）速度⁽¹⁰⁾ の不変性から結果する同時性の相対化（否定）に対する批判が、時間の様な成層化（持続と知覚しつつある出来事——見かけ上の現在——との共軛関係）によって、その同時性が基礎づけられた後は、一転して革新的な様相を帯びたものとなるのも事実である。それは、近代（十八世紀と十九世紀）の科学者や唯物論者はもちろんのこと、観念論者でさえもが、それとは知らずに自然認識の基礎にしていた唯物論の三位一体⁽¹¹⁾——(1)延長をもたない一瞬の時間的系列 (2)物質的諸存在の集合体 (3)物質の諸関係の所産たる空間——への徹底した批判となるからである。

「自然は一つの体系でなければならぬ⁽¹²⁾」というのが、彼の合理主義者としての信念であり、関係性（意味づけ）こそが實在だとするこの哲学が、単なる無知の告白に脱しないのも、それによって有限な真理が捉えられるという、この出来事の様な意味づけ（本質的結合関係）によっているが、にもかかわらず、事実というものの不盡性から必然的に結果するより深い無知とその根本的な神秘性は、この意味づけ理論のうちにも既に包含されているのである。「人間の知性の限界を感じて心打ちひしがれることなく時間と自然の創造的推移の神秘性とを想うことはできない⁽¹³⁾」という。神の一つの性質（始源的性質）を合理性の根拠としての究極的な非合理性に置く、彼のギリシア的なテオロギーを含むコスモロジカルなオントロギーの萌芽をこれに見ることは容易であろう。経験を選び好みしないという實在論に立った徹底した経験論は、こうしてその合理主義を介して神秘的感情をも包括する實在論的形而上学に総括されることになる。無限性を蔵する有限性の意味づけ理論に（美的）価値づけが伴うとき、彼の目ざしたオントロギーは完成される。

註

- (1) 『相対性理論』序文。
- (2) 識別されるもの (discerned) という表現は CN で使われている。
- (3) CN p. 49.
- (4) 『相対性理論』 p. 34.
- (5) Ibid., pp. 66-67.
- (6) Ibid., p. 19.
- (7) Ibid., p. 21.
- (8) Ibid., p. 22.
- (9) この説明は PNK pp. 61-62 に依っている。
- (10) CN p. 107.
- (11) Ibid., p. 53.
- (12) Ibid., p. 54.
- (13) 『相対性理論』序文 vi. 「物理学と幾何学との間に認められる古い区別をそのまま持ち続けるということである」また「保守的結論というのは、関係性による認知において現われとしての世界は直接的経験の従属的全体である諸層の継起へと成層化されるものとする」(Ibid., p. 70) 「私は同時性の基本的性格について旧式の信念を抱いている」(Ibid., p. 71)
- (14) 相対速度の対称的特性から臨界速度 c が導かれという (Ibid., p. 9) 従って、臨界速度は光速に関係づけることなく定義可能だとされる。
- (15) CN p. 71.
- (16) Ibid., p. 146.
- (17) Ibid., p. 37.